

前進のイメージ

津守 眞

三歳から四歳へ

子どもはある時期、急に成長を感じさせる時がある。もはや赤ん坊ではなくなり、日常生活でも、会話でも大人の仲間入りをする。目的意識も明瞭になり、

言語によるコミュニケーションが可能になる。その時点で見直すと、以前からの積み重ねがそれをつくってきたのであることがわかる。その子は、三歳と四歳との間にそういう時があった。

ずっと前にその子が作ったケーブルカーが庭に吊り

下げたままになっていた。「ボクが生まれる前からあったの？」とその子は尋ねた。「ずっと前にババチャンと作ったでしょう」と話したが半信半疑だった。同じ物を見ているのに成長したこの子には違って見えたのだろう。

卵を割って失敗したら、「この次から気を付けた方がいいよ」と言ったり、雨降りに外出する時、「雨だから長靴にしようかな」と言ったり、常識的な過去の体験がある。その反面、幼児は、大人にはすぐには理解できないような行動をする。後になって全体像が見えてくると、この子はこんなことを考えていたのかと、大人とは違う考え方に気付かされる。

空間のイメージ

四歳になったばかりのその子は、大人の大きな椅子（積み木ではない）を動かして、ババチャンの場所と自分の場所とをつくった。この子にとってはババチャ

ンは母親の次に親しい存在である。私（ジジちゃん）の場所は離れた別のところにつくった。力を出して大きな家具を移動させて空間をつくりかえるのである。それから椅子の向きを変えて、脇の棚の上に自分が上れるようにした。「冒険」と言う。子どもがよじのぼって移動できる空間である。それからババチャンの化粧箱（木製でかなり重い）を両手に抱えて動かして食卓の椅子につなげた。その上に乗り、下にもぐり、本棚を作り、じきに何種類もの空間ができた。内に入り、這い、引きずり、押し上げ、降り、上に高く立ち、姿勢を変えるごとに違った空間になる。電話室があり、ババチャンとケータイで話もできる。そこがままたごとの想像の場になった。三十分もかけて力を出して新たな空間をつくり上げたのを見て、私はバシユラーのいう「イメージが生まれ出る瞬間」がここにあると思った。イメージとは「知覚を歪曲し、見えないものを見る力」である。大人には見えないものを子ども

は見ている。それは子どもの遊びによって見えるものになる。同様のことをお茶の水女子大学の附属幼稚園で、むかしからどんなに感動をもつて見てきたことか、また、言葉をもたない愛育の子どもの保育の場でも、同様のことに私はいまも面白く付き合っている。

いま、二、三歳のころを振り返る

ここに述べた四歳の幼児の空間のイメージは、発生的に見るならば、際限なく以前にさかのぼることができる。生後十か月の時、その子は全身の力を出して鏡台のつまみを引っ張ったら引き出しが開いて、内部の空間が開いた。そこに内部空間の発見の始まりがあった。眠くてふらふらなのに、新しいことを見付けるとキラリと目が光って遊び始めた。その顔は光り輝いていた。

一歳を過ぎて歩くようになった時、その子は台所へ行き、重いリンゴの袋をぶら下げて勝手口から外へ出

たがった。座敷の入り口から中をチラと見て、ここなら知っているぞというようにこちらに戻つて来た。空間の全体を把握した自信をもって、家の中を歩いて回つた。

そんな経過を経て、積み木を積み、自分の思うような空間をつくるようになった。いちどきにそうだったのではない。最初は積み木を一個手に取つて床に置いた。その上に、もう一個手に取つた積み木を置いた。高く積むイメージが最初からあつたとはいえない。同じ場所にもう一個置き、更にもう一個と六個重ねた。そうしたら積み木が崩れた。一つ置いたその同じ場所にもう一つ手に取つた積み木を置くこと、つまり自身存在を確かにして上へと重ねる。高くなるのは結果である。それが崩れる。私がもう一度それを積むことによって、その子は存在を確かにする。このように脇からそれを確かにくれる大人がいなかったら存在への自信は育たないのではないか。

赤い自動車の広告を見て感動する

その子が一歳半になった時、その子は朝、私どもの家に来るなり、大きな赤い自動車の広告を見て、ウーと歓声を上げた。そして丸円筒形の積み木を三個並べ、上に立方体の積み木をのせた。一緒にいるうちに、その子は自動車の広告を見た感動を積み木で表現したことがわかった。丸い積み木は車で、上の四角い積み木は自動車のボディだろう。赤い自動車の広告を見て積み木で作ることは何日も続いた。一歳半の幼児が三十分も注意を継続して、ひたすら遊ぶ。ほら見てというみたいにチラと私を見る。ひたすら遊ぶというのは、感心して見ていることを含めて大人と子どもとの共同作業である。この時があつて分別のある幼児後期へと進む。

一瞬間ごとに変化する子どもの生活に追われて一緒に過ごしていた三歳の子どもが、いつのまにか分別あ

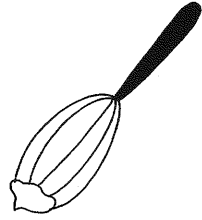
る年齢になる。文字も覚え、数もわかってくる。そうすると大人は区切りのはっきりした教育を求める。いわゆる学校教育の形態が力をもつてくる。だが、今の時代にはそれ以上のものが求められているのではないか。

前進する船のイメージ

四歳のこの子の世界に戻ろう。

大きな家具を移動させて空間をつくっていたその子は、粘土をしたいと言う。油粘土がいいと言う。色がついていて、小さな形も手軽に作れる。ジジちゃんには鯛の塩焼きだと言って、粘土で形を作って持つてくる。電気スタンドを二つ持つて二階から下りてきた。こっちは往きの道、こっちは帰りの道と空間だけでなく、時間も自由に行き来できる。テーブルの下の暗い空間にそのスタンドをおいて灯りがつくようにし、通りがかりに鈴に体が触れて鳴るようになってきている。テーブルの下の暗い場所に三個の光ができた。光はい

つでも子どもにとって魅力である。そこにできたのは水族館である。しゃべりながら遊びは延々と続く。昼食の間も席を移動させたり、同じイメージは続く。



最後に、押し入れから扇風機を出して自分でコンセントにつなげて回した。「スクリュー」だと言う。部屋全体が船になってそこに魚がいる。ここまで見てきてこの子の遊んでいる部屋全体が船のイメージになっていたのだとわかった。船が前進するイメージである。もうすぐ棧橋につくと言って、扇風機のスピードを変える。ビニール風船を膨らませてくれと言う。舟の中で遊ぶ用である。私は面白くて子どもと一緒に笑ってしまった。下地になる能力が準備できた時に、それらを駆使して子どもがつくり上げたのは前進する世界のイメージだったのは実に興味深い。

これはただの船のイメージではなくノアの箱船のイメージでもある。数か月前から、私は、アーサー・ガーサート作 小塩節・小塩トシ子訳『ノアの箱船』こぐま社（動物たちが箱船に乗り込む様子が細かく描写されている）をこの子に読んでいた。

イメージとは、その根源をいえば、ほとんど無意識の物質のイメージである。それが言語の力を借りて意識的な想像力となる。嘘つこと知りながら想像の世界に入り、それを遊びに発展させ、それが遊びを継続させる。

世界はよい方向に向かって前進していると子どもが感じるようにするにはどうしたらいいだろうか。基礎学力もたいせつだが、それ以上にたいせつなものがある。

希望の見えない現代にどうするか

現在はこれまででなかったほど、希望が失われつつあ

る時代である。知らない人はまず疑えと教える学校教育。そう教えなければならぬような世相。通りすがりに子どもたちに笑いかけても笑い返したら危ないと思える社会。どこか人間の本来の道にはずれているのではないか。

日本だけではない。どこの国にもナショナリズムが台頭し、世界中がその方向に走っている。これまで異人種に寛容だった先進国でも、寛容の徳が失われかけているのではないか。自国のことしか眼中にない、勝ち組と負け組とに分けて、隣人に慈しみの目を向けない世界相。もう一度人間の原点にもどらなければならぬ。

私は紀元前八世紀の旧約時代のイスラエルを考える。帰るべき場所をすら失った古代イスラエルの人々がバビロニア捕囚の時代、政治的にも経済的にも個人的にも希望の失われた時代に書かれたのが第二イザヤである。「慰めよ、わたしの民を慰めよ」と冒頭に記さ

れるイザヤ書40章。「慰める」とは、相手の心になることである。「頑張りなさい」「修養して立派な人になりなさい」というのではない。いまのままでもいい、「いま」の中に希望を生み出し他人に示しなさいと、「見よ、新しいことをわたしは行う。今やそれは芽生えていく。」と第二イザヤは言う(イザヤ書43章)。

私の学校の十一歳のHくんは、言葉を話さないし、歩くこともできない、食事も一人では摂れないのだが、身体状況のいい時に、私がお子に本を読んであげると目をそらさずにジッと聴いてくれる。聴衆が聴いているかどうかは、語り手にはすぐにわかる。子どもも同様である。この子は表現の簡潔な聖書の物語を好む。それが彼の心に訴えるものがあり、ある時は慰められ、ある時は期待に満ちて次を待つ。イザヤ書がこの子の心に響いているのは不思議である。

(保育研究者)